サメ人間

文:名無しの東北県人
イラスト:bowalia/黒ノ樹/池下真上

ウツテンカイ

登場人物

ソフィア・マリューコヴァ　―　キャラクターデザイン

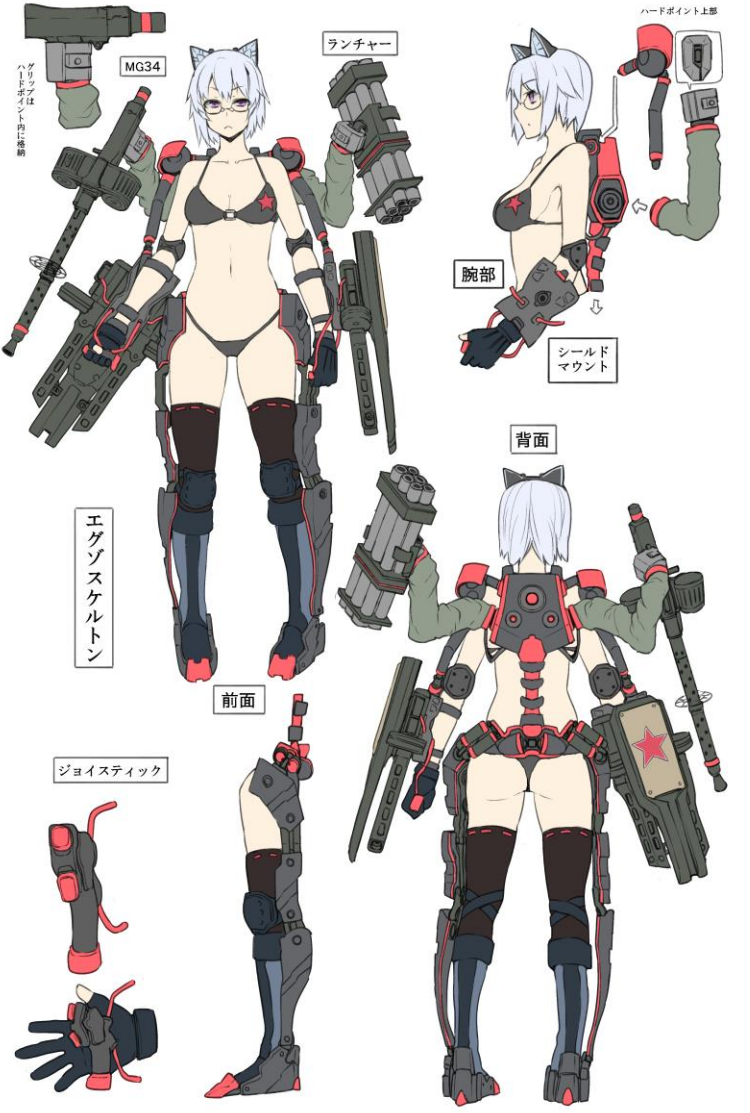
アノニマ　　ー　キャラクターデザイン

イルザ・ヴァレンシュタイン ― キャラクターデザイン

クリーチャー
&
メカニック

サメ人間
前
後
面
閉
開
オロロ
ロロロロ

横
背面
鋸人間
前面
鋸


ハードポイント上部
ランチャー
MG34
グリップは
ハードポイント内に格納
腕部
シールド
マウント
背面
エグゾスケルトン
前面
ジョイスティック

サメ人間

一九四六年八月十一日。
「いっけな〜い！　ナチスナチスぅ〜！」
『豚ハ死ネ』
青黒いカビ浮かぶライ麦パンを咥えて走っていた四十代の女が、突如背後からチェーンソーで斬り付けられた。
真っ赤な鮮血をぶちまけた肥満体は絶叫しながら前のめりに倒れた。衝撃で、腕や腹の付き過ぎた脂肪が醜い波を肉上に浮かべる。
「うぅ〜っ……痛い……いたぁい」
精神病院からの脱走患者が汚れた顔を上げて弱々しい唸りを漏らした半秒後、分厚いブーツ底が貫頭衣纏う彼女の頭部を踏み潰す。
『豚共ヲ殺セ』
自分を女子学生だと思い込んでいた存在を絶命に追い込むと、ナチスドイツの改造人間――通称『鋸人間』は、チューブが多数繋がるガスマスク奥から奇怪な

電子音を響かせつつ顔を上げた。
「後退！　後退しろ！」
温度持つ血液や脳漿で全身を赤く染めた殺人機械の視線の先では、泥沼化した戦局を打開するための大反攻作戦に参加するも、早々に逆襲されて戦意喪失したソ連兵が蜘蛛の子を散らすかの如く敗走している。
「改造人間全機投入！」
自軍陣地の塹壕から、双眼鏡で東に向けて一目散に撤退していく敵を視認したドイツ軍将校は大声で無線機に叫ぶ。
「イワンを逃がすな！」
「斉射始め！」
間髪入れず、撃破された数台のＴ‐３４／８５中戦車が前面で黒い煙を上げ、その周囲に乗員達も焦げた塊となって転がっている防御陣地の後方に並べられたナチス人間大砲が一斉に火を噴く。
打ち上げられた鋸人間は緩やかな放物線を描いて次々にソ連兵達の間に落着、土煙の中で四本の両手を広げると、一斉に二連チェーンソーを高速回転させての大殺戮を開始した。

『豚ハ死ネ。豚ニ死ヲ』
まず、真鍮製の空薬莢が無数に転がる土上に倒れた兵士の胸部と下腹部が鋸で貫かれた。
『死ヲ！』
鋸人間は傷口から溢れ出た桃色の臓物を見て絶叫する男を瞬時に持ち上げると、そのまま一回転して地面に叩き付ける。
『ミンナ死ネ。ロシア人ヲ殺セ』
衝撃で脳が砕け散るが、『Zナチス』こと機動国家社会主義超ドイツ労働者党の支持者が作り上げた殺人マシンは、残った胴体を自分に向けて必死に撃ちまくる他のロシア人目掛けて放り投げた。直撃を受けた数名が軽やかに宙を舞う。
「ファシストの化け物め！」
「元は人間ッ！　人間なんだ！」
全員が煤汚れた顔に絶望を浮かべるソ連兵達はそれでも恐るべき相手に激しく抵抗するが、鋸人間は全身に鉛を叩き込まれようが、銃弾で腕を切断されようが構わず突進して得物ごと男共を次々に切り裂いていく。ナチ・チタニウムの刃が振るわれる度に無数の命が失われた。

「うわっ！」
完全に心を圧し折られ、短機関銃を捨てて放棄された塹壕を必死で駆けていた一等兵が湯気立つ臓物に足を滑らせて思い切り転倒する。
『豚ハ死ネ』
咳き込みつつ泥を吐き出す彼の鼓膜をやや後方からの機械音が叩いた。
「ひっ……」
額に汗を滲ませて肩越しに振り向くと、全身を返り血で汚した四本腕の悪魔が自分を追って塹壕に降り立ち、ガシャガシャと耳障りな音を立てつつこちらへと近付いてくる現実が突き付けられた。
「嫌だっ……嫌だぁっ……」
慌てて立ち上がるなり少しでも距離を取ろうと必死で走った一等兵だったが、やがて行き止まりに追い詰められてしまう。しかし彼は足元に米国製の散弾銃が転がっていることに気付き、急いでそれを拾い上げた。
「くたばれ！」
そして、最早一メートルを切った距離にまで迫り、騒々しい作動音を轟かせて今まさに右手の刃を振り上げた鋸人間に叫びながら発砲する。

一発目で散弾が相手の右肘を抉る。回転したままの刃が水溜りに落ちた。
二発目で相手の腹部が弾け飛ぶ。無数の歯車や金属部品が四散した。
三発目で相手の上体が爆発する。ヘルメットや二本鋸付きの腕部が宙を舞った。
――違う。
眩い爆炎に思わず顔を背けた一等兵の脳内は、即座に否定で埋め尽くされる。
――奴を倒したのは、俺の撃った弾じゃない。
そんな疑念は、風で流された炎の向こうに一人の少女が膝を折って身を屈め、地面に拳を突き立てている姿が現れたことで確信に変わった。
「選ばれし者の恍惚と不安、二つ我にあり」
右前方に自分の得物であろう日本刀を突き刺している彼女は、その体勢のまま端正な美貌を上げ、眼鏡のレンズ奥にある双眸を友軍兵士に向ける。
「あっ……ああ！　ああ！」
何度も頷いてから立ち去る一等兵の姿を背に少女は銀髪揺らして立ち上がり、右回転の中で地面から刀を抜くと、背後から迫っていた改造人間を縦に両断した。
「例の亡霊か……！」
蠢く二つの断面から臓物が零れ出る様子を双眼鏡越しに見たドイツ軍将校は

忌々しげに吐き捨て、改造人間の攻撃目標を既に完全壊滅状態のソ連軍部隊からたった一人の少女に切り替える。
『豚ヲ殺セ！』
三機のチェーンソーメカニック傀儡は自軍陣地発の電気信号を受信するなり、一斉に黒いマイクロビキニだけを身に纏う新手目掛けて突進した。
「常に慎重かつ！」
だが迫り来る殺人軍団を前にした少女は表情一つ変えずに土を蹴り、右上から左下にかけての一閃で飛び掛かってきた一体目をまず袈裟斬りにする。
「礼儀正しく！」
続いて左下から右上にかけての第二撃――その後ろに控える機体が振り上げたチェーンソーが自分に到達する直前、刀の先端で機関部を串刺し刑に処した。
「振る……」
頭に猫耳の飾りを付けている鍛え上げられた肉体の持ち主はすぐに全身の力を使って刃を引き抜き、
「舞うように！」
最後にその場で横回転、背後から肉薄を試みた三体目を二つに分かつ。

「照準良し！　装填良し！」
今度は三号突撃砲が放った砲弾が少女に迫る。だが彼女の右方向から飛来した鉄塊は、左からの肉薄を図っていた更なる殺人機二体が、瞬時の縦一閃によって作り出された美しいV字の先端で貫かれる手助けをする形で役目を終えた。
「私達は祖国や東欧で、自由に対する挑戦や見境なき残虐行為と戦ってきた」
少女は、もしかしたら昨年五月に終わっていたかもしれない独ソ戦の最前線に視線を巡らす。
「私達は戦闘行為に尽力し、人類社会に安定を取り戻すために戦っている」
少女は、自分のような戦闘美少女やロボット兵等の存在が日常化してしまった東部戦線……ロシア某所の戦場で敵影を求める。
「だが、その努力と自己犠牲が評価されることはなく」
すぐに半壊した農具置き横に背の低い車両を見つけた亡霊は、突撃砲を捨てて逃走を図る敵兵を亡き者にすべく再び土を蹴り上げた。
「仮に評価されたとしても、条件付きで渋々認められるに過ぎない！」
逃がすこともできた。だが彼女は殺害を選択した。
理由は極めて簡単である。

殺さないと、正気ではいられないからだ。

■

八時間後……ドイツ国内某所の湖畔を二つの影が進んでいた。
人気のない草むらには立ち入り禁止の看板が何本も立ち、以前この地の攻撃を試みて失敗した、大地に突き刺さる英空軍爆撃機の残骸は濃い苔で覆われていた。
「あれだ」
反ヒトラー派の意向を受けて深淵に足を踏み入れたドイツ軍偵察隊の一人は、月明かりに照らし出される洋館を見つけると、すぐ後ろの仲間にここで待つよう命じて土手を登る。
『ナチスとの戦いが泥沼化する中、世界の各地でドイツ軍に立ち向かう少女達が現れ始めました』
彼が構えた双眼鏡の奥――ブラウン管に社会学者の姿を映すテレビが置かれた室内では、二つの汗濡れた肉体がベッド上で激しく絡み合っていた。
それは、ギリシャの哲学者アリストテレスが紀元前四世紀に記録した光景を、

最も悪趣味かつグロテスクに再現した恐るべき光景だった。
『言うなれば超人』
内部に軟骨を持つ白い腹ビレの進化形が二本同時に前後する度、溢れ出た蜜が泡立つ接点から淫音を部屋中に響き渡らせる。
『一人につき一つの様々な特殊能力を持った彼女達は、市民から亡霊を意味するスペクターと呼ばれています』
直径は四センチ、長さは四十センチの交接器の動きに連動して、下から手足の生えた逞しい魚体に太腿を絡める女性将校が嬌声を上げた。
『まるでコミックのようなコスチュームに身を包む彼女達は』
霊長類とサメのキメラは創造主の更なる求めに応じ、壁に妖しく浮かび上がる二等辺三角形の右側面に鼻先を押し付けた。
『ノルマンディー上陸作戦の失敗以降、連合国の軍事作戦において重要な役割を果たすようになったと言っても過言ではないでしょう』
そして、貪るように頭そのものを動かしながら唾液を振り撒いてそれを舐める。
『現在、彼女達はスペクターズと呼ばれるヒーローチームに身を置いています』
桃色の左先端には本来あるべきヒレと同じ灰色の腕が伸び、親指と人差し指が

それを掴んで絶妙な力加減での愛撫を行う。
『しかし、その扱いや存在を疑問視する声も決して小さくはありません』
お互い何度も体位を入れ替えて交わり、やがて相手の限界が近いことを察した褐色肌の女は「来てぇん」と両手を伸ばして異形の鼻先を撫でる。
怪物が喉奥から呻きを漏らしつつ瞬膜を閉じた瞬間、半解放構造となっているペニス――正確にはクラスパーと呼称される――内を精液が駆け抜けた。
「あっ……っ」
異形は交尾器の前にあるサイフォンサックをポンプのように使い、たっぷりの海水と共に白濁を創造主の胎内目掛けて勢い良く流し込む。
「かかってるんっ……っ！」
たっぷり時間をかけて、この時を待ち侘びていた子宮が少しだけ粘度を下げたコンデンスミルク調の濃い液体で満たされていく。
「……っ……こんなに出してん……っ」
荒い息で肩を上下させるイルザ・ヴァレンシュタインが腹部にまで飛び散ったサメ汁を人差し指と中指で愛おしげに掬って舐め取り、生臭く苦々しいその味で『鮫とは交尾する魚である』という漢民族の優れた感性を実体験する一方、

「まさか……見えてるのか……？」
彼女から窓越しに横目で鋭い視線を送られた兵士は、背筋に剥き出しの電極を近付けられたかの如き戦慄を覚えた。
「逃げろ！　今すぐ！」
「おい、何が見えたんだ？」
鼓膜を叩かれた仲間が只ならぬ事態を察して頭を上げる。
だがドイツ兵は、振り向いて返事をする前に土手横の水面から突如飛び出した巨大魚によって湖へと引き摺り込まれた。
「嘘だろ……」
慌てて土手を駆け登った仲間は、辿り着いた先で悲鳴を上げる戦友の上半身が、背ビレを水面上に出して足に食らい付いている魚類によって、コバルトブルーの波間上を水平移動させられている信じ難い光景を目の当たりにした。
サメだ！
あ　れ　は　サ　メ　だ　！
サ　メ　が　い　る　の　だ　！
もう一人の兵士は即座に小銃を構えて発砲する。

「畜生！」
銃口の先で一、二度水飛沫が上がった後に背ビレが七・九二ミリ弾で貫かれて赤黒い血肉が飛び散るが、敵の存在に気付いたサメは叫び続ける男と共に水中へ潜航してしまった。
「クソッ……どこに行った……？」
ドイツ兵が次弾をボルトアクション式の自国製小銃に込めながら毒づいた瞬間、縦一閃が彼の左腕付け根に走る。
「えっ」
一拍遅れて体と切り離された上肢が地面に落ちた。
「俺の手エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！」
次に、土上に転がった自分の腕を視認して絶叫した青年の肢体が横の一撃で軽々と吹き飛び、十メートル先の大木に叩き付けられる。
「――ッ」
背中から全身に走った衝撃が肺の空気を奪う。
胴体左側の断面から夥しい出血を見せるドイツ兵が重力に引かれて落ちる前に、その怪物は著しい内臓の損傷に起因する吐血で汚れた彼の喉元を掴んだ。そして

顔を横に向け、先程捕食した餌の頭部を吐き捨てる。
「夢だろ……？」
ドイツ兵は肉が削げ落ちた胃液塗れの頭蓋骨から眼球が零れ出る有様を見て、両頬に幾筋もの涙を走らせる。
「これは悪い夢だろ……？」
だが全身に走る激痛は、これが夢でも妄想でもないことを如実に表していた。
「夢だ……こんなの悪い夢なんだ……」
しがないドイツ国防軍の中堅下士官が目にした最後の光景は、サメと人間との合体獣が自分の眼前で大きく口を開く様子だった。

■

一九四六年八月十二日。
イタリア北部の飛行場では長い消耗戦で心身共に疲れ切った米軍の兵士達が、いつ訪れるとも知れない搭乗時間を延々と待ち続けていた。
「全くいいご身分だ」

仲間と共に滑走路近くに一纏めにされている兵士は、無理矢理スケジュールに割り込む形で着陸した輸送機と、その機内から現れた人物を見て冷笑する。
「俺達みたいなバッタとは住む世界が違うんだろうよ」
赤いコスチュームを纏ったスペクター、ファイヤーウーマンに対する反応は、どの兵士も大概似たようなものであった。
彼女はその名の通り炎を自由に操る能力を有していたが、ここにいる者達は皆、スペクターの実態が戦意高揚や国債の販促等に用いられるマスコットでしかない事実を知っているのだ。
「あの人達、こっちを見てるわ……」
「こちらへ」
冷たい視線に気付いたマント姿の少女を、ヒーローと組織間の調整役を務める将校らが高級車に誘導する光景は、泥中で過ごしてきた兵士達にとって、まるで一部分だけが摩り替えられたかのような現実感のない光景だった。
「みんな集まってる？」
それから一時間後、ファイヤーウーマンは飛行場からそう遠くない場所にあるスペクターズの司令部に足を踏み入れた。

陸軍基地の地下深くに作られ、大型爆弾の直撃にも耐える施設内の会議室には、『記事内でポーズは取っていても、実際の戦場には現れない者達』が端正な顔を並べていた。
「どうでしたか？」
着席する前に飛行能力を持つスカイレディから問われたファイヤーウーマンは、椅子に腰掛けるなり「駄目だったわ」と苦々しい否定の声を発する。
「私達が前線に出れば、もっと犠牲を減らせるのに！」
水陸両方で行動可能なアクアガールが膝上で握った拳に力を込める。
ファイヤーウーマンの否定は、ヒーローチームのリーダーが単身本国に赴き、政府の人間に自分達の前線投入を具申するも、良い回答は得られなかったことを意味していた。
「私達だって……！」
自分が持つ超人的能力を人々のために役立てたいが、実際に与えられる役割はチアガールと共に戦時国債の販促を行う任務位というスカイレディのジレンマは、スペクターズに所属する者達全員の共通感情だった。
「くそっ！」

アクアガールは心底苛立った様子で真新しい新聞を机に叩き付ける。
「よしなよ」
「でも……！」
スカイレディが青白いコスチュームのスペクターを制止する光景を見ながら、ファイヤーウーマンは自分の感情のやり場に困った。
「――ッ」
強く噛み締めた唇から赤黒い雫が滴り落ちる。
彼女だけではない。
この部屋にいるスペクターは皆、全員がトンネルの出口を見つけられずにいた。

■

アイアンランド。
周囲を強化コンクリート防壁で囲まれた、ソ連の一大軍閥が本拠地としているこの場所が、東欧の何処に位置するかは誰も説明できない。
『規律を守れない者は出て行け』

しかし、この言葉が対空機関砲・高射砲・地対空ミサイルから成る三段重ねの防空コンプレックスによって守られている市街地の各所に赤い血文字で書かれた武装要塞国家は確かに存在していた。
「死にたくない。助けて。家に帰りたい」
逆向き星条旗――同国国旗がコルダイト火薬臭い風に靡く下で少女は膝を折り、グルジア人傭兵に跪かされたドイツ兵の目を覗き込む。
「この言葉は私の愚かさの象徴よ」
改造したソ連軍の将校用制服から浮いた腹筋と肉感的な太腿を露出させているソフィア・マリューコヴァは、一秒と経たずに黒い長髪を靡かせて立ち上がると、前日の戦いで囚われた捕虜に背を向ける。
「傷口から腸を出して泣き叫ぶ彼女達に何もしてあげられなかった……」
血で血を洗う残忍な絶滅戦争の中心的人物にして、首相でも大統領でもない、アイアンランドの絶対的支配者たる『首長』は続ける。
「何もしてあげられなかった……」
赤い瞳から伸びる視線上に立っていたオランダ人傭兵が上官の意向を汲み取り、一歩前に出て鞘内のナイフを抜いた。

「何も……」
人権団体曰く『ナチス野郎相手なので合法的』な蛮行の始まりを悟った捕虜は悲鳴を上げるが、他の傭兵達に両肩を掴まれて動くことができない。
「やめっ――」
剃刀宜しく研ぎ澄まされた刀が縦に走る。
勢いで先端から飛び散った熱い赤滴が地面を汚した直後、削ぎ落とされた鼻が同じ場所に転がった。
「こんな地獄の住人になってしまったのは、誰のせいでもなく自業自得なの」
兵士は両肩を放されるなり地面に倒れ込み、豚めいた悲鳴を上げて顔の断面を押さえながら左右にのた打ち回った。指の間から凄まじい勢いで鮮血が溢れ出し、白骨見え隠れする土から茶色を奪っていく。
「貴方は今、『どうしてこんなことをするんだ』と思ってる筈」
女王は次にスイス人傭兵から拳銃を借りると、硬い銃口を突き刺さんばかりの勢いで苦しみ悶える男性の後ろ髪に押し付けた。
「単純な話よ」
トリガーが引かれた。ドイツ人の頭が思い切り棒で殴られた西瓜の如く四散し、

脳漿や頭蓋骨の破片、目玉の混合物を噴き上げる。
「やらないとね、正気ではいられないの」
顔を返り血で汚したソフィアの双眸には、深い絶望の光が湛えられていた。

■

「火星にぃ……っ！　火星に農場ができちゃうぅぅぅうううっ！」
上官から任務遂行の褒美として与えられた情交でこのような絶叫を上げていたアノニマは、それから数時間後、再び王の部屋に戻った。
「夜食をお持ち致しました」
銀髪の少女が机に置いたトレイには、切り分けたハムチーズトーストとサラダ、硬め仕上げのゆで卵が半分、スプーン一・二五杯分の砂糖及び粉ミルクを入れたコーヒーがある。
「ちゃんと食べてくださいね」
アイアンランドの中枢とも言える豪邸に住み、今や東西双方への傭兵派遣業で巨万の富を得るようになった精神的超人は、特別な用事がある時以外は基本的に

朝昼晩毎日同じメニューを消化していた。
「うん」
バスローブから肩口や臀部をだらしなく覗かせているソフィアは部下に対し、ベッド上に力なく横たわりながら生返事を返す。白いシーツは乱れ、枕も足元で曲がっていた。情事が終わった直後のまま、片付けもせず放置されているのだ。
「後で食べるから」
長い黒髪の少女は澱み切った表情で、尽く自分の顔だけが乱暴に削り消された昔の写真を代わる代わる見続けている。
「人生における最大の悲劇は二つあるの。一つは、欲しいものが手に入ること。もう一つは、欲しいものが手に入らないこと」
「ソフィア様……」
スペクター全体から見ても非常に高度な戦闘能力を持つアノニマではあったが、上官が抱える深い心の闇だけはどうすることもできなかった。
「私は誰も手に入れられないものを手に入れた。でも……」
西側のスペクターがマスコット的な存在であるのに対し、東側のスペクターは大戦の初期から躊躇なく最前線に投入され、今日に至るまでの戦いでその大半が

戦死していた。
そして、その多くはソフィアと親しい間柄にあった者達だった。
「ソフィア様が達成してきた偉業の数々は誰にでもできることではありません。地道な努力の賜物です。誰もが無理だと考えていたスペクターによる国家運営、生存圏の確立、経済基盤の安定化……」
それは遮るように口走ったアノニマの揺るぎない本心だったし、私情を抜いた客観的な見方でも間違いないと公言できる確証が彼女にはあった。
「私が保証します。だから、そろそろ自分を褒めてあげても良いと思います」
ソフィアはスペクターとして何の特殊能力も持たない一方、他のスペクターが決して真似できない精神力とバイタリティを持っていた。その部分をアノニマは心から尊敬している。
「ありがとう」
ソフィアは感謝を口にしつつも、「それでも」と付け加える。
「私が欲しいのはね、私の至らなさ故に死なせてしまった昔の仲間達と再会して、またあの頃みたいに楽しく過ごす毎日だけなの」
ソフィアの過去に以前何があったかを把握しているアノニマは、それが絶対に

不可能であることを知っていた。
「それだけなのよ……」
「わかりました」
だが、だからこそ、今日も「それは無理でしょう」とは言えなかった。本人もそれを重々承知しているからこそ、過去に囚われて苦しみ続けているのだから。
「イルザ博士から『例のモノ』が完成したとの報告がありました」
だからアノニマは、今日もソフィアが内側から怪物に食い破られないように、現在進行形の対応すべき事項を自然な形で差し出す。
「ベルリン行きの飛行機は準備できています」
そうしないと、きっと彼女は正気ではいられなくなってしまうからだ。

■

一九四六年八月十三日。
「ハローワールド！　お待ちしておりましたん！」
地下に降りたエレベーターから出るなり、黒い武装親衛隊の軍服に身を包んだ

イルザ・ヴァレンシュタインがソフィアを出迎えた。
「どぞどぞ、こちらへどーぞ！」
　ナチスドイツの先端技術研究部隊を率いる身でありながら、さも当然のようにアイアンランドにも協力するマッドサイエンティストは、資金を提供してくれるクライアントを地下施設の奥へ案内した。
「幼少期の過酷な経験は素晴らしいクリエーターを生み出します」
　茶色の長髪をポニーテールで纏めているイルザは一方的な自分語りを始める。
「私は祖母が大好きでした。何でも知っていて、優しくて……」
　これ、何回目よ……と辟易しつつも、ドイツ国内某所の地中に作られた通路を進むソフィアは黙って耳を傾けた。
「でも祖母はアルツハイマーを患いました。私は、私のことがわからなくなった祖母に罵声を浴びせられる度、自分の心が死んでいくのを感じました」
　二人が進む薄暗い通路の左右には、大きな試験管の中にホルマリン漬けされた試行錯誤が柱のように並んでいる。それは悪夢の光景だった。
「祖母が亡くなった時、私は強く感じました。もう誰にも、こんな悲しい思いをさせてはならないと」

人魚のように下半身がサメになっている、両手がヒレの赤ん坊。
頭がなく、首の途中に二本、右肘にサメの頭がそれぞれ付いている成人男性。
どういう訳か、上半身がウバザメの頭部に変わっている老婆。
「元々、私は総統のために働く気はありませんでしたん。私の目的はアオザメの脳細胞を利用して、アルツハイマーの特効薬を作り出すことだけなのですから」
最後に「祖母なんて最初からいないんですけどね」と要点を纏めたイルザは、最深部にある巨大水槽の前で立ち止まると部屋の照明を点ける。
「自分でも試しましたが、セックスの相手としても最高ですん」
ソフィアは「素晴らしいわ」と満面の笑みを褐色肌の女性将校に送る。
ガラスの向こう側で泳ぐ異形は、彼女が要求した通りの怪物だった。

■

『豚ヲ殺セ！　豚ヲ殺セ！』
何の前触れもなく夜空で照明弾が炸裂した直後、マグネシウム・リボンにより照らし出されたソフィアの豪邸目掛けて一斉に鋸人間が突撃した。

「間に合わなくなるぞ！　撃て！」
　中庭を猛烈前進するナチス殺人軍団に対し、家主の親衛隊以外の何物でもないアイアンランド兵達は屋上や二階の窓から激しい銃撃を浴びせる。
「撃ちまくれ！　どんどん撃て！」
　瞬く間に六機が自動小銃及び軽機関銃の集中砲火で戦闘不能に追い込まれた。
『豚ヲ殺セ！』
『豚ヲ殺セ！』
　幾筋もの火線がサーチライトを照射された鋸人間を貫いて手足をもぎ取るが、痛覚や恐怖といった概念を持たないマシンは仲間の四肢を踏み越えて突き進む。
『殺ス！　全テ殺ス！』
「まずい！　一機抜けたぞ！」
　一機が豪邸の入口付近に設営された防御陣地に飛び込むや否や傭兵の上半身が錐揉み回転して土嚢と共に宙を舞い、M２重機関銃の真横で崩れ落ちた下半身の断面からは生臭い臓物が湯気立てて溢れ出た。
「常に慎重かつ、礼儀正しく振る舞うように」
　顔面の半分を弾丸で吹き飛ばされている鋸人間が邸内に突入せんとした瞬間、

凛とした声と同時に放たれたロケット弾がその後ろ首に直角で食い込んだ。
『豚……ッ』
続く小爆発で千切れた四本の腕が空中に放り投げられる。
「リフトワイヤー解除。幸運を」
「ありがとう」
チェチェン人パイロットとの短いやり取り後、エグゾスケルトン――重武装の強化外骨格を纏った姿で二機のヘリから切り離されたアノニマは、豪邸の入口に立ちはだかるようにして着地する。
「奴らが蔓延させた腐敗によって、あの方の心は荒廃した」
銀髪鬼は中庭に高速ホバー移動で半円を描きながら敵との距離を詰めていく。
「今や私は、怒りの権化と化して奴らを鉄火の暴風に叩き込める」
バックユニット左部の六連装ランチャーから発射されたロケット弾が接近する三機中、特に突出した一機のすぐ真横で近接信管を作動させる。
大爆発で鋸人間の右手が全て吹き飛び、大きくバランスを崩した殺人マシンは砂煙を上げて地面に突っ伏す。
「奴らは自分達が無意識に行った罪を償うことになる」

残る二機の数メートル横を濛々たる土煙上げて通過した『匿名』の女性形は、バックユニットの右側にマウントされているＭＧ３４軽機関銃を自動旋回させて背を向けたまま発砲、更にＳ字を描き、射線上にいた一機が右膝を撃ち抜かれて姿勢を崩す姿を視界の隅に映すと飛翔した。

「自らの血によって！」

豪邸の外壁に取り付くと重力に逆らって赤レンガを削りながら直進……足元を蹴り上げ、まだ立っている敵の背後に降り立つ。

「ただ奴らが地獄を見ればそれでいい！」

アノニマは黒いパッドで覆われた左膝を向き直った鋸人間の腹部に叩き込み、相手の体がくの字に折れ曲がると、即座に防御だけでなく近接戦用武器としても使用可能なシールドを振り下ろして斬首刑を敢行した。

「そうでなければ」

切断口から激しく火花散らす残骸が前に倒れる姿を背に横回転、損傷個所から鮮血を噴き上げつつ身を起こそうとしたもう一体の頭部に右踵を振り下ろした。

「あまりにも理不尽過ぎる！」

足首が頭の半分まで一気に食い込み、飛び散った血と脳漿が地面を著しく汚す。

「誰一人としてあの方に手を差し伸べなかったように！」
　言わば、アノニマはソフィアの弁護士のような存在だった。最強の盾として、今日に至るまで内外の全ての敵から彼女を守り続けてきた。
「誰一人として奴らに手を差し伸べない！」
　そしてスペクターとして彼女が持つ能力は、ロンメルのＤＡＫが北アフリカで発見したエネルギー・コア――エグゾスケルトンの動力源――という結晶体との極めて高い親和性だった。
「あの方が切り拓いた道は、獣共の臓腑に繋がっている」
　アノニマは横から接近してくる新たな三機に対し、その場で体ごと急旋回してジョイスティックの上部ボタンを親指で押す。眩い閃光と共に、ランチャーからロケット弾が撃ち出された！
　白煙が濃い灰色の殺人機の間に次々と吸い込まれ、立て続けの大爆発の中から鋸が付いた腕が宙を舞って噴水の中に落ちる。
「奴らのハラワタに！」
　赤黒の強化外骨格を纏う少女は炎に向かって右手を出し、縦二連に装備されたＰＰＳｈ‐４１短機関銃を猛連射しながら突進した。

「豚ハ死ネ！」
大量の七・六二ミリ弾を叩き込まれ一機が爆発するも、後続は煙を切り裂いて飛び出し、一気に距離詰めて斬撃を放つが、アノニマはそれを右部防盾で防ぐと無防備な相手の腹部に左シールド先端を突き刺し、ジョイスティックを操作して右同様に縦式マウントされている二門の小火器で零距離射撃を浴びせつつ後方に放り投げる。
守護者は、地面に叩き付けられた衝撃で首を圧し折られながらも立ち上がった鋸人間の喉に右シールドの先端を突き入れた。
そして左一回転しつつ相手を持ち上げて再び地面に激突させ、強い衝撃で赤い血飛沫を広げるも、今度は突き刺したまま地面に円を描いた上で右回転し彼方に投擲した。
「――ッ」
刹那、背後に気配を感じたアイアンランドの最強戦力は反射的に身を翻した。
「サッ……！」
地面を突き破って出現したサメが、大きく口を開けて迫ってくる。
「メッ……！」

噛み付きは間一髪でアノニマの鼻先を薙ぐ形で終わったが、青と白の大魚体がスローモーションで空中を進む光景は、あまりにも現実感のないリアルだった。
「これは冗談か……！」
ヒレの代わりに手足が生えたホホジロザメを見て、少女は眉間に皺を寄せる。
「いいえ！　現実ですん！」
九百キロ以上離れた地下室でソフィアと共に戦況をモニターしているイルザが親指を立てると、彼女の最高傑作は自己進化を開始した。
「いーち！」
二足歩行で立ち上がった異形の右手が左右に張り出し、その先端に目と鼻腔が存在するシュモクザメの頭部に変化した。
「にーっ！」
続いて左手がブレード上の長い吻を持ったミツクリザメの頭となり、左右共に剥け落ちた尾ビレは先鋭的なヨシキリザメの頭が代わりを務めるようになった。
「さーんっ！」
最後に背中から伸びた四本の触手は、その先端全てが古代ザメとして知られるラブカのグロテスクな頭部だった。

「サメ……人間ッ！」
大きく咆哮したサメ人間を前に狼狽の声を漏らしたアノニマだったが、すぐに冷静さを取り戻し、右手ジョイスティックのトリガーと上部スイッチをそれぞれ人差し指と親指で押してソ連製短機関銃と鹵獲ドイツ製軽機関銃を発砲しながら急速前進した。
しかし自らも一歩前進したサメ人間は、シュモクザメ頭の平坦部を斜めにして大量の鉄炎を尽く跳弾させる。
「ならば！」
舌打ちしたアノニマは前進の途中で焼け残った鋸人間の胴体部分を拾い上げ、横一回転分の遠心力を込めて異形に放り投げた。
だが激突する直前、頭に角を二本生やす魚人は左手の鮫刀でそれを両断する。
「本命、行け！」
魚体の後方に分かたれた残骸が落着する前にアノニマはロケット弾を放つも、立ち止まったサメ人間は背中から伸ばした触手でもう残り少ない彼女の虎の子を弾き飛ばし、周囲に立て続けの爆発を引き起こした。
「なっ……」

サメ人間は唖然とするアノニマとの距離を詰めるなり上半身を大きく捻り込み、右フックの要領で右手のシュモクザメ頭による噛み付きを放つ。
「――ッ」
アノニマは上半身を倒して自らも右回転、敵の一撃を空振りに終わらせると、自らはボディブローのように相手の腹部にシールドの先端をぶち込む。
肉抉られたサメ人間は頭を左右に振って苦悶の咆哮を響かせた。
「いける」
追撃を与えるためアノニマは前進するが、サメ人間が地面を掘り上げて地中に潜航する方が早かった。
ソフィアの護り人は自分を軸にして七十五連サドルマガジンが取り付けられたＭＧ３４軽機関銃を土盛り上げて進む背ビレに向けて連射する。
これは、異形が仕掛けた罠だった――。
「しまった！」
スペクターの足元からラブカの頭が口を開けて多数飛び出す。
「クソッ！」
急速後退したアノニマは左手で迫ってきた触手の喉元を掴むと右手側の火器を

浴びせて粉砕、同時並行で右アーム上の機関銃を旋回させて背後から迫る三本の先端を四散に追い込む。
　続いて左右から迫った触手に冷静に両手を広げて発砲して対処、正面から迫るそれを右回し飛び蹴りで肉塊に変えた所で、これが本命なのだと言わんばかりに、ラブカが幾つも転がる地面を突き破ってホホジロザメの頭部が大きく口を開けて飛び出す。
　間一髪で後方に縦回転して死から逃れた亡霊は、地面から出切って咆哮と共に猛烈前進してくるサメ人間に突撃した。
　裂帛の気合と同時に突き出した両手のシールド先が、鮫頭で受け止めならぬ、『噛み止め』られる。
　腕四つでの取っ組み合いが始まった。
　鮫キメラは立て続けにホホジロザメ頭で噛み付きを繰り出し、アノニマは髪を左右に揺らしてギリギリで回避する。
「撃たれろ！」
　アノニマはＭＧ３４軽機関銃を旋回させて怪物の口内を撃ち抜こうとするが、右から回り込んだヨシキリザメの双頭が機関部に噛み付いて発射を阻止した。

「――ッ！」
金属破音の方をアノニマが見た一瞬を見逃さず、サメ人間は思い切り全体重を掛けて彼女を押し倒す。
即座にシュモクザメの頭部が鹵獲されたパンター戦車宜しく赤い星が描かれた木の板を貼り付けている右部シールドに歯を立てる。
「アノニマを舐めるな！」
少女は無防備な自分の顔目掛けて左手のブレードが垂直に突き入れられる前に無理矢理体を動かし、左頬から僅か三・七センチ横に刃を空振りさせると下から巴投げのような形でサメ人間を放り投げる。
その流れの中で、ぼきりと嫌な音を立ててミツクリザメの吻が圧し折れた。
着地して大きく咆哮しながら向き直ったサメ人間は、こちらも怒り声を上げて突進してきたスペクターに飛び付いて左シールドに噛み付き、そのまま左回転、勢いのままに彼女を地面に倒す。
叫びと共にアノニマは上体を起こし、プロレスラーが用いるラリアットに近い右パンチを怪物の下顎に浴びせた。
今度は自分が倒される側になったサメ人間は下から迫り来るスペクターの体に

尻尾を巻き付け、上を取るなり両足を絡めて再び噛み付きの連撃を繰り出した。
「援護します！」
四度目の噛み付きが失敗に終わったタイミングでサメ人間の右横顔に白煙源が食い込み、直後の爆発で生臭い血と肉片が飛び散った。
「一人で戦わないで！」
解放されて尻餅をついたままのアノニマが声の方に視線を向けると、米国製のＭ１バズーカを肩に載せたポーランド人傭兵が屋上から自分に向け手を振る姿が見えた。
「俺達も付き合いますよ！」
他にも、ＰＴＲＳ１９４１対戦車ライフルを構えた仲間達もいる。
「ふふーん」
遥か彼方のイルザから指令を受けたサメ人間の頭部に亀裂が入り、間から光が漏れ出す。
「何の……輝き……ッ？」
アノニマは、四つに割れたホホジロザメの頭の中から、黒々としたウバザメの頭部が露出する信じ難い光景を目の当たりにした。

「はっしゃーっ！」
イルザがスイッチを押した瞬間、エラに光を蓄えたウバザメの口が大きく開き、体内の暗黒怨念寄生虫が危機を察して逃走を図る傭兵目掛けて撃ち上げられた。
「逃げろ！　逃げっ――」
まるでビーム兵器のように右から左にかけて嘔吐物が撒き散らされ、不幸にも射線上にいた者達は蠢く大量の蟲によって肉の全てを食らい尽くされた。
「ひぃっ……」
その恐るべき光景に恐怖したアノニマは、無意識のうちに近くで擱座していたＺＰＵ‐４対空機関砲の陰に後退ってしまう。
「怖い」
太腿を震わせるスペクターは本心を口にした。
「でも」
だが同時に、そう声に出す。
「私はあの方の兵隊だ。あの方のためなら、どんな相手とでも戦う」
触手に襲われるソフィアのあられもない姿を脳内に思い浮かべた瞬間、怒りのパワーがアノニマの全身に行き渡り、澱んだ瞳にも生気が戻った。

「憎しみはダナイデスの底なし樽だ！」
アノニマはソフィアが全てに絶望していた頃、惨めな負け犬に光明を与えた詩、ボードレールの『憎しみの樽』を口走りつつ物陰から飛び出す。
「取り乱した復讐が、赤く強靭な腕で」
怪物が自分を視認するなり放たれた寄生虫を左右の急機動で回避、空間を狭め、
「空虚な闇に、死者達の血涙を汲み入れている」
左手の二連装小火器を構えて撃たんとするが、人差し指がジョイスティックのトリガーを引く前に間一髪の差で尻尾の一撃を受け倒されてしまう。
「しかし彼女が犠牲者を蘇らせようと」
真の頭を閉じたサメ人間は尻尾で擱座した車両を噛み、膝立ちになった少女にハンマー宜しく叩き付けようとする。
「その肉体に活気を与え、再び血を絞ろうと」
だが亡霊は残存する全ての火器類を力の限り撃ちまくって迫り来る重金属塊を到達直前に完全消滅させた。
「千年の汗と努力は、悪魔が開けた穴から零れ落ちてしまう」
ヨシキリザメの頭だけが彼女の鼻先を通過し、生臭い風で煤汚れた頬を撫でる。

「憎しみは酒場奥の泥酔漢だ」
少女は立ち上がる中で残弾ゼロとなった全武装及びシールドを切り離す。
そして、整備員がハイドラと呼称するエグゾスケルトンの基幹フレームだけを纏った姿で怪物に飛び掛かり、
「レルネーの大蛇そっくりに、内で新たな乾きを生み続ける」
激しく暴れ回る人造生物に振り落とされそうになりながら、渾身の力を込めてホホジロザメ頭の上二枚を引き剥がした。
「幸運なる酒飲みと違い」
続いて再び剥き出しになったウバザメ頭に右手のナイフで深い切れ目を刻み、左手でその内部に手榴弾を押し込める。
「憐れむべき運命を与えられた憎しみは」
アノニマは振り払われた。
だが勝利を確信した彼女は空中で口元を緩める。
「決して、机の下で眠ることはできない！」
銀髪のスペクターが土に叩き付けられた直後、ウバザメ頭が内部からの爆発で木っ端微塵に四散した。

赤黒い血と青白の肉片が天高く舞い上がり、満月に醜い縦筋を走らせる。
多くの命を呑み込んで行われた失笑モノの茶番劇は、こうして幕を閉じた。

■

「火星にぃ……っ！　火星に農場ができちゃうぅぅぅぅぅっ！」
テスト大成功の賞与として、『総統ディルド』を装着したソフィアからバックで激しく突かれていたアノニマが絶頂した。
「お前達は、一体何が目的なんだ！」
両者の股間から蜜が迸る光景をモニター越しに興味深く観察していたイルザの鼓膜が、口汚いドイツ語で叩かれた。
「それぞれ違いますん」
イルザは洋館地下の実験室に拘束された、左腕のない友軍兵士の頬を張る。
「それ……ぞれ……？」
「まず私は単に『自分が作りたいものを作りたい』だけですん。故に総統閣下に無許可でソフィア様に協力し、スターリンが知らない資金提供を受けていますん」

女軍人は八月十一日からずっと拘束されている男の前で、「で」と続ける。
「量産したサメ人間をＶ２ロケットに入れて、米本土と英本土の計五十六箇所に撃ち込む」
褐色肌の中尉は味方の右耳を掴み、ナイフを付け根に食い込ませた。
「送り込まれたサメ人間は死ぬまで徹底的な破壊と殺戮を繰り返す」
赤い肉の断面から溢れた血が、激痛に歪む顎線に沿って伝う。
「まずここまでが、あの方の手段ですん」
落ちた右耳を拾い上げたイルザは体温残るそれを男の口に押し込もうとするが、彼は唇を固く閉じ、顔を背けて頑なに拒んだ。
「恐るべき蛮行を防げなかった西側のスペクター達は、自分の無力感に死ぬまで苦しむことになりますん」
イルザが小さく指を鳴らすと、武装親衛隊の黒い軍服に身を包んだ部下二人が、友軍である筈の国防軍兵士を椅子ごと羽交い絞めにして無理矢理口を開かせる。
「ソフィア様と全く同じように『何をやっても心の空白を埋められない苦痛』を追体験することになるんですん」
中尉はこじ開けられた口に耳を自分の拳ごと呑み込ませるかの如く押し込み、

○・五秒と経たずにそれを嘔吐物と共に吐き出して激しく噎せた兵士に告げる。
「そしてこれが、あの方の目的ですん」
「狂ってる……お前らみんな、狂ってる……」
女性将校は充血した両目を真っ赤にして肩を上下させる捕虜の前で微笑んだ。
「今回のアイアンランド襲撃作戦は諸々の実験でしたん。サメ人間は通常兵器で簡単に殺されてはいけませんが、だからと言って余りにも強くし過ぎてしまうと、今度は地球がサメ惑星になりますん」
「どうして……どうしてそんなこと……」
「無茶苦茶な逆恨みなのはソフィア様も承知してますん」
そこまで言い終えたイルザはホルスターからルガーＰ０８拳銃を引き抜くと、
「でもあの方は、誰かのせいにしないと自分を守れない、最低の人間なんですん」
金メッキが施された銃身を兵士に向け、深呼吸してから人差し指に力を込める。
地下室に、乾いた銃声が響いた。

終劇

【スタッフ】

キャラクターデザイン／温泉万太郎様

クリーチャーデザイン・メカニックデザイン／ｓｉｇａｍａ様

タイトルロゴデザイン・装丁関連／とむ・きーす様

ショップ特典タペストリー用イラスト／しおこんぶ様

会場限定特典ポストカード用イラスト／ジェントル佐々木様・でらうえあ様

スペシャルアドバイザー／知的風ハット様

獣姦シーン監修／サイバーイグアナ様・チキコ様

推敲協力／れど様・ミクト・アタイ・ショクシャー・ワキスキー様・正太郎様・Ｍ‐鈴木様・ジェントル佐々木様

サメ人間2

2017 WINTER

『サメ人間』
文:名無しの東北県人
イラスト:bowalia/黒ノ樹/池下真上
発行日:2017 年 7 月 1 日

発行:ウツテンカイ
印刷:株式会社 緑陽社

※本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容を一部/全部を無断で複製・再配布することを禁じます。